

日本体育大学
名誉教授

本間啓二

職業レディネス・テストの解釈と
職業の内容

職業レディネス・テスト(VRT)では、自分の興味・関心の持てる仕事や作業を知ることができ、それらが含まれる主要な職務を持つ幾つかの職業名が例示されている。テスト結果によって自分の興味の持てる仕事や職業志向性を知ること、将来の職業の選択や進学先、学部・学科・コース選択に役立てることができる。

将来のことを考えるときに、どんなことをやりたいのか、どんなことなら興味が持てるのかといった自分に対する理解を深めることは、これからの進路や職業の選択にとって重要な指針の一つとなる。自分の個性を知り、その個性が生かせる進路を柔軟に考えることが就職・進学先への適応にも大きな役割を果たしている。

さらに、職業に対しても自分の個性と結びつけるためには、表面的ではなく、全体的・構造的に理解する必要がある。職業がどのような人材を求めているのか、職業に含まれる職務や作業にはどのようなものがあるのか、などを事前に知ること、自分と職業との接点により明確となり、将来に向けた具体的な準備や心構えができるようになる。

中学・高等学校教員を例に教員の職務を構造的に考えてみたい。主要な職務としては、教科指導、学級・ホームルーム指導、校務分掌などがあるが、それ以外にも学校行事の分担や地域・保護者対応と数多くの職務を担当している。これらの職務の中にもそれぞれ数多くのタスクが含まれている。代表

的な職務として「教科指導」を例にタスクを挙げてみたい。

教科指導では、まず「教材研究」が挙げられる。興味領域ではI領域(研究的)が関連領域となる。I領域への関心が高い教員は、より専門的に最新の情報を取り入れたり、調査・研究に力を入れたり、自らが学ぶことに喜びを感じたりする。

「教材作成」では、R領域(現実的)やA領域(芸術的)が関連し、ワークシートや配付資料、掲示物、パワーポイント資料などを、学習内容が身につくやすく、[※]学びに興味関心や楽しさが持てるようにデザインしたり工夫を凝らして作成したりする。

「授業実施」では、S領域(社会的)が関連し、生徒との良い関係を築き、学習に関心が持てるように工夫しながら、生徒とのコミュニケーションを取って授業を進めていく。また、授業中の集団規範の維持やグループ学習などE領域(企業的)の要素も求められる。

「試験問題作成」では、C領域(慣習的)の要素が大きい。E領域やI領域、R領域などとの関連も考えられる。単元目標に沿って授業内容の到達基準と配点などを考えて出題する。生徒への配慮や採点のしやすさから問題用紙や回答用紙の工夫なども考えたりする。

「採点・集計」では、事務処理としてC領域の要素が大きい。I領域への関心が高いと、クラスごとの平均点だけでなく、標準偏差や偏差値などを算出して、クラスごとの得点の分布状況をテスト結果の資料として提供すること

もある。

このように「教科指導」に含まれるタスクだけでも職業興味領域の6領域すべてが含まれ、担当する教師の職業志向性によって、タスクごとに力を注ぐウエイトが違ってくるものである。

VRTでは教員はA領域に近いS領域に含まれている。しかし、前述のように職務・タスクに分解するとすべての興味領域との関連があることが分かる。職位が変わるとタスクの内容はさらに広範囲になっていく。

どのような職業でも入職して与えられた仕事の中には、やりたいと思えない仕事や苦手な仕事が含まれているものである。しかし、職場の職務全体を見れば、魅力を感じる仕事や、やりたい仕事を見つけることができる。頑張つてやっている仕事に興味や喜びが持てず、続けることに不安を持ってしまう、やがて気持ちが不安定になり、仕事が苦痛になり退職するといった一連の流れを自分の個性を知ることに変えることができる。自分には興味が持てない仕事だと始めからわかっていれば、そのつもりで仕事に取り組み、たとえ結果に喜びが持てなくても自分にとっては興味が持てない仕事だと割り切つて捉えることができ、自分を知らないことによつて起こる不安、不安定、苦痛を起こさずに済むようになる。

VRTの結果は、実施時点の選択に活用するだけでなく、自分の職業志向性を知ること、長い人生の様々な選択に生かせるようになることが最も大切なことである。